



經濟社會の存立及び其の發達を論ず

津田, 武二

(Citation)

經濟學商業學國民經濟雜誌, 35(6):859-893

(Issue Date)

1923-12

(Resource Type)

departmental bulletin paper

(Version)

Version of Record

(URL)

<https://hdl.handle.net/20.500.14094/00053609>



經濟社會の存立及び其の發達を論ず

津 田 武 二

序 論 (經濟史への原理的小引)

一、開 題

凡て從來の歴史は階級闘争の過程也と觀じ又財産權所有權制度の推移を蹟づけるが如き考察は、一般社會史の問題を採りて即ち經濟史觀に嵌め込まむとする者である。同様に文化史自體が拔んで採擇せらるることがあるが、文化の考察は個性・自由の方向を命題とする限りに於て概ね社會の發達史歴史一般の問題たるも、その故に却りて文化史は即經濟史なるを否定すること明かにして、茲に別して「經濟的」文化をクォリファイす可き根據を見出すことが當面の爲事であらねばならぬ。所謂經濟史觀としての唯物史觀は生産機關本位の社會觀なりと通り一遍に解釋せられるのであるが、マルクスの謂ふ眞意は其の遺稿たる經濟學批評附編「序説」より察する所、技術的「生産方法」を指示するに非ず實は繼續的再生産乃至「社會

會的生產關係を内包とするものであつて見れば、究極には其の外延は「流通市場的關係裡に於ける經濟史の把握に成るべきことが注意される。而して此く見解するに當りて經濟社會をば自然的本來的血縁又地縁に據る基礎社會として受け容れる觀念上の錯誤を却け、同時に經濟生活をば國家政治乃至社會生活一般と同一視するの誤謬より脱れねばならぬ。次に他の一の考へ方は經濟的文化の發達を目して勞働集約の過程と倣せり。換言すれば勞働分化の錯雜その集化の組織が成る道行を經濟史と看るものの如し、坂西教授商業研究所創建記念講演。按ずるに斯の種の見解は文化の進行を概念に形どりて夫れの綜合的社會心理的考察なる個性自由の開展の問題に加ふるに、社會成員個々の最小手段最大效果の意識即ち所謂經濟主義たる個人心理的考察を以てし、不知不識に或は巧妙に織り込んで兩者を相交渉せしむるが如き考へ方に他ならぬが、それに止る限り經濟社會の存立を客觀的に意義づける何者も無し。當に他に先天的に豫想さるべき經濟の中心觀念に關し、經濟生活は所有生活であるとの斷論、坂西教授高商開校廿周年記念講演が與へられるときは、經濟的文化の推移に就ての曩の提言は愈々多義的なるに甘んじなければならぬ。如是に慊らぬ立場からしては乃ち後來的紐帶による

派生社會の一としての經濟社會の認識〔本論參照〕に出發すべく、且つ其の社會の發達をあとづけるに際しても跛行せぬやう「經濟的」の概念をロギッシュに確立する必要がある。之れ蓋し經濟學に於けるといふときき嚮導觀念の上に經濟史も亦據立して、故に對象としては正に同一にして無二のものに經濟的の考察は加へらる可く、而して原理的には他を以て許され難きを思ふが故である。仍て他の機會後段參照經濟學理一般の思考にあつてと同様、爰に凡ゆる時處の事象に互り共通なる經濟の內在的表徴たる「財的流轉」を以て、經濟史考の論理的前提と見做すであらう。

二、「經濟的事例」の若干

その昔青砥左衛門藤綱が河中に落とした一文の錢を拾ひ上げる爲に人夫を使役して百文の金を費した事は、數々の修身書に於て賛同され是認されて居るが、吾々は其の事實を倫理的判斷から離して又單に金錢を愛撫尊重する思想としての似而非經濟觀念からでなしに、乃至は致富的政策觀によらざる純理路の歸結として茲に其を經濟的事實にまで肯定せむと欲するものである。言ふまでもなく藤綱の所爲は在來の節約本位の經濟觀より言へば極めて非經濟的なる典型である

が、之が理解は藤網一個人の「家計」の所謂經濟を離れたる他の觀點より認め能ふであらう。即ち其の事例で一文の錢は既に河中に埋沒すべかりしものが再び收得され、百文の金は勞賃として多數人の所得と成るを得た、斯くして其の事の無かりし場合一文の錢を棄てゝ願ひぬ場合に比して、より大なる金錢が且つ夫れに隨つてより大なる財貨が流通場裡に出現することになる。かく家計とは距つた「市場」の側面より觀じて即ち財的流轉の行程に即言して彼の所業を「經濟的」と斷じよう。その心意に本づき金錢愛護の教訓を爾々云々するに非ず、それが示せる流通行程に於ける實際的行動の事實を實認して斯く斷じ能ふのである。右とは一見背致する如くして實は正に適中する事例であるが、譬へば大獵の時に漁師が故意に魚を河中に投げ込んで憚らぬ事實は如何に觀じるべきか。之を經濟的に是認して經濟行爲と謂ふべくんば、その意味は魚を棄てることゝ斷じて利益的なるが故にあるのでなく、或は思ふ利益を獲得し能はぬやも料り知られぬ點に「危險を内包とする企業」(別論「企業利得に就て」(參考)の真相が繋がるのであるが、而かもそれを經濟的なりと云ふ所以は彼の行爲が市場を對象にせるが故で在り、魚を漁獵し配分するといふ單なる技術的行爲に止らずして、その結果が市場行程に於て行動

を示現するが故を以て經濟行爲であらねばならぬ。これと同様の考へ方が例するに奢侈に就ても思惟し能ふのである。その浪費は恰かも河中に魚を投棄するのと同一轍であるが、しかも猶同前の事理にして敢て奢侈を經濟的なりと思惟し能ふ。それは「惡魔も美なり藝術の見方に於ては」と謂ふとひとしく言は稍々逆説的ではあるが、しかも藝術乃至經濟の一元的絶對の見方よりして考察するものにして、もとより實用實利を離れたる純粹なる理論的學問的立場が其處に儼存する所以である。(恐らく註するまでもなく筆者は一の學問者として斯の言をなし敢て奢侈を經濟的なりと斷するものにて、其の情は彼の資本主義經濟社會を飽く迄も冷靜に客觀的に批判したるマルクスが實は内心にあつて努めて之を排撃するの熱情を藏したると同趣なる事を、本稿全篇の經濟觀を通じて讀者は推知せられるであらう)。だから此の考察は其の行爲に倫理的道德的評價を加へることに本づかないのは勿論であり、しからずとも行爲者の心的動機に即して或は又一般人生觀的に察して、それが營利的利益追求的なるが故に經濟行爲なりと做す考へ方とは殊なる。例言すれば、一人の虛榮心が能く萬人の勞働者を養ふとか一層適切には「奢侈が産業を統帥する」とか言ひ得る場合に「マングヴキユ」不平を鳴らす蜂

の群れ〔參看〕人の心性の是非は不問に附して其れにより惹起する實際的行動の側面を勘考し理論する餘地があり得る。茲には其の後者なる勞働扶養產業統帥等の見地に立脚するものである。通説の如くんば浪費は非經濟的の甚しきものであり、反之出費を尠くすること可成安價なるものを購求しようとする心性こそ經濟の心諦なりと思ひ倣され、頓てそれが奢侈を否む心理を醸成してをる。しかも斯かる心性の集注して向ふところ需要の増大は價格を昂騰せしめる實際的傾向を誘起するであらう、而して如上の市場の現象として實示されるものを卒直に經濟に實認せむとする考へ方から進めば、奢侈は經濟的也との言説を順當に首肯し能ふのである、何となれば奢侈は市場構成の原素であり能ふが故を以てである。更に一段考へ方を進捗し且つ要約して行くに、一の取引事情を例として在來の經濟觀は直に「安い高い」を觀取して云々するのであるが、此れは「商業」なる部局的見方に囚はれたるものであつて、全局的には同じ事情を察するに他の側面から即ち言葉を立てて謂へば「好く賣れる」とか「買手が尠い」とか云ふ如き考に出發して、始めて「經濟的判斷が正しく成り立つ」と思はれる。言ひ換ふれば前説の如く「費用算定」本位なるは未だ實用的商賣觀を雜ふること少からぬものであつて、より純粹には後

説の謂ふ「市場適能性」に立脚して始めて純經濟觀が把持されよう。然れば農工殊に商業的觀察を錯雜せる從來の對自然的技術的考察に囚はれずして、組織的社會的なる理解が導入されねばならぬ。他の一の例として手形取引行爲を採るのに、手形の割引ありとしてもそのこと自らに經濟的の意味は見出されない、而して夫れが參與する金融市場なる社會的機制體に對する干繋に於てのみ經濟行爲として識認され能ふ（別論「交換及び價格の社會的見方」參考）。蓋し交易現象一般——物物交換より信用取引に至る凡てを理解するのに、人の相對關係を游離せしめたる物財それ自らの流轉行程を認め、その行程の裡に所謂經濟を捕へむと思ふ者である。だから其の理説は個人心に依據せず綜合心理からなる社會的範疇に入り込むことになる。かくして財の流通範域若くは市場なる一の社會機制體に關涉する限りに於て「經濟的者」を會得することが幾多の事例に徴して確め得られるであらう。

三、上位概念としての經濟

經濟的諸現象の理會、正しくは諸現象を經濟的に理會するに方つては、先づ經濟を「上位概念」として把捉すべきである。所謂生産交換分配消費の全行程に關與し

て、經濟は存するものであつてみれば、經濟的に生産すること同時に經濟的に消費することも成り立たねばならぬ。兩者の間に論理的には繼起の干繋はあるべきでない、がゆゑに生産から次々移して消費へ經濟の概念が導入される事理ではあり能はぬ。經濟の概念を局限して生産行爲に求めることはなほそれを消費行爲に限りて概念づけむとすると同様に背理である。而して又經濟は生産消費その他の現象の綜合觀念ではない、それら諸他を超越する一の觀念として、その意味よりしては抽象的者として把握されるであらう。それは恰かも雜多なる社會の諸現象の蒐積が即ち社會現象たるに非ず、その之を社會現象と觀せしむべき社會なる概念が嚮導者として抽出されてあるわけにて、然れば社會諸現象なる經驗的實在の理會に爾く非經驗的構成があり能ふと正に同一事理の本然にして、生産交換諸他は「經濟現象」として具體的の實在たり、それと方式的に牽連すべき極限としての「經濟」の概念が把持されねばならぬ。さて斯く上位的に概念づけらる可き經濟にあつて其に對し根本觀念たるものは「財の效果的充當」であるべきか。上位たり仍て生産消費全てに亙るを注意させるのであるが、その效果的充當の意味は諸表式 $W-W$ 、又 $W-G-W$ 、又 $G-W-G$ 、等マルクスの擧示するものにて典型的に表

現される、その意味する所 W が W' となり G が G' となり移る過程に謂ふ所の効果が體現されてゐるのであり、且つ其の如き財の充當は生産に限らず消費に即しても關心事たり、而してそれが畢竟經濟の理會に對して豫件的なる根本觀念として豫考されてあるべし。それ然り爰に經濟の本質を「財の流轉」に想定せむとする理據があり能ふ、即ち財の流通行程に於て經濟の相を捕捉すべし。蓋し其の流通の裏には效果的充當が豫想として暗指されるのであるが、經濟が嚮導觀念たる理會の進出點として指示すべきは財貨の流轉を措いて他にあらず。反對に效果的充當そのことは經濟を裏づける以外に出ても猶ほ在り、政治的施設藝術的制作學問的著述諸般の行爲にも且つ存し得よう。然れば財的流轉則經濟たり、斯の唯一無二のもの財の流通を契機として又その限りにて經濟的者は把握されねばならぬ。茲に財貨流轉と謂ひて含意するものは、在り來りに物財の交換をもて取引を概念するとは少しく異つた角度から捕へようとするものであつて、乃ち流通現象を「市場構成」の方向において追求する。だから比較させて言ひ表せば對人的則物的個人心意的なる交易關係に就てでなしに、對市場的則貨幣的綜合心理的なる流通行程において經濟を實認せむと欲するものである。而して斯の如き理路はとりも

直さず經濟の社會的意義づけ社會的範疇への攝取いはば經濟の概念の社會化を
事とするに歸着するが、その本意は技術論的自然科學的理解を離反せむとするに
あつて、却つて社會科學としての經濟學の面目に正に恰當せずにはおかぬであら
う。同時に又前段の對比は取引情態の史的變遷を略々摘示するものであるが、そ
れは經濟學の對象が歴史的なる經濟生活であり、勢ひ其に關する概念一般も歴史
的所産なることに顧みて、此の如き歴史的推移の裡になは本質的なるものを捕捉
せむとする歴史的 understanding に出發するのであつて、所謂發生的解釋に基づく事象の説
明とは異り、其の念慮は歴史をとほして本質を發見せむとするに在り、事象の異時
異處に互る過程にあつて附隨のものを剝落しつつ共同性質を開明せむとするに
在る。遮莫經濟は生産交換等諸般の經濟現象を成立せしめる所以の本質的實在
であるべし。即ち諸他現象の雜なる内容の集積により「後から」成る性質のもので
はなく、其の雜多なるを限定する意味よりして形式的には既に「先き」にあつて經濟
の概念は存するのである。經濟的事實をとほしての非經驗的演繹によりてのみ
經濟的諸現象は概念せられるであらう。かくの如き理會に立ちて例之奢侈行爲
もなほ經濟的者として把握されるのは蓋し當然に過ぎようか(前節參照)。

本 論 (經濟史の過程)

一、經濟的行程の特性

財貨の流轉範圍なる所謂市場が構成せられてある一の社會的機制體を茲に「經濟社會」として想定しようと思ふ。而して該經濟社會は財の交易流通關係に依る非有機的組織體たり、故に主體を有せず、交換手段によりて相互の間に起さる無組織の連絡又は關係の形體である(デハリン⁽¹⁾)。随つて財の流通領域の裡は又其の限りは、財產私有及び自由競爭が前提されてあると思考される。事實市場の成立は勞働並に資本の自由移轉による自由競爭を以て條件づけられる可く、其の勞資の自由輾轉の範圍、即ちそれを通じて調節せられる無組織の統一若くは非有機的關係範圍の推移こそ經濟史が當に面接するの對象である。斯く主體なき盲目的の機制體にして且つ其の統整者として競爭が放任せられる以上畢竟それは他の側に於て正逆なる獨占の作用をも許容するものであり、這個の自由競爭財產私有の條件下なる鬭爭が是認せられる領域にこそ經濟社會の純性が具現されて居るのである。此の事情を看取して「市場の中立性」に想到するのが一面の解釋たるべ

し、メーン⁽²⁾。

其處にありては隨時隨意の財の流通が免許皆傳せられる意味に於て、經濟社會をば一の中立地帯と看做すであらう。ビジネス・イズ・ビジネスの考へ方を以て經濟的者の眞個の面目の把持せられる所以も、亦かくの如き鬭爭場裡の中立的色彩にある。(或はメーン思へらく、市場法が傳來して國際法と成ると爾云ふ)。經濟史は此の間の消息を明に示すであらう。最も古くは市場が一の地域として指定され、氏族團體相互の間に介在して、其の團體内部に於ては免許されざる鬭爭が其處には自由に許容せられる中立地帯が實現された。封建制下にあつては領主に對して特許料を支拂ふことによつて、免許區域にありての自由なる取引的行爲が容認せられた。國家組織の下に於ては斯く直接免許の要を見ないが、猶ほ政府に對する關係上は間接的に納税により權利を取得することを以て、財貨流轉則鬭爭場裡に不斷に入り込みて行動し能ふのである。現代の經濟組織にあつて其の根本豫件たる自由と私有とを保障する機關として國家は存在の意義を有つ。現在の組織下にて財の流通市場の活動は貨幣制度と租稅制度とを基礎とするに於て國家が經濟に牽連する、即ち税金の徵收と貨幣の發行とを以て經濟の保障機關たる

が、且つそれにより國家則經濟社會と誤認せられつゝあるも、本來的に然る理に非ず、其の之れと合一合體せざる組織を前後時期を異にして實認し能ふわけである。乃ち國家内部が金融的に統一せられ國家的トラスト相互の行動を通して市場が世界的に構成せらるゝとき、謂はゆる世界經濟が實現されつゝあるのであるがそれは、取引鬭爭が通商條約下の世界的なる免許領域にまで進行せるものと理解されねばならぬ。斯く財の流通範圍が特定の地點から漸次に場所的關係を抽象したる空間的領域に推移する事を經濟史實として思考するのであるが、其の如き市場行程に交渉する限りにおいて經濟的者を認めるであらう。而して市場が鬭爭關係に依據する間は、よし經濟體系は世界的と成るも猶ほ依然として盲目的不合理的、無主體的である。然れば又鬭爭的取引に據つて立つ以上は、經濟社會は其の成員の掠奪的行爲、一方的作用を是認するものであり、否なそれを公認するところの其の所謂中立性に經濟の特異性があると謂はねばならぬ。（通説が市場の作用をば相互的な需給の均衡を以て解くのは、恰かも對自然的順應なる充慾行爲をば經濟として云々するとひとしく、共に技術的理解であり、論理的には後者が經濟以前なるに對照させて正に前者は經濟以後とも言ふべきか。思ふに經濟は過程で

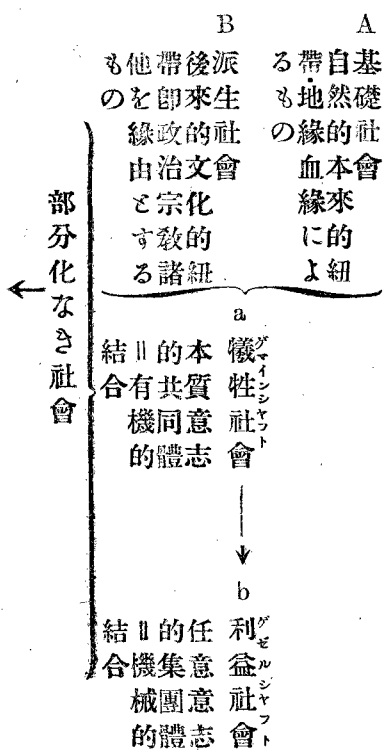
ある。財貨が流轉する動態にこそ經濟の實想は捕捉さるべし。蓋し取引は飽くまでも自己の本位の行爲であり、市場は取引則「懸け引き」の修羅場に他ならぬ。此の事は特に近代の「經濟社會」に於て顯著に看られるのであるが、其の本性は既に中世の社會組織にあつても、一般社會生活が傳統的慣習を以て規律せられ、社會人に「とり」彼の爲さねばならぬことが、即ち彼の爲せることであつた時代にして、猶ほ財の流通に關してのみ自己の獨創を許されたる事情の裡に觀取されるのであつた。遡つて古代人の生活が凡て血縁乃至地縁に羈束せられし當時にも、市場に即しては團結せる各自己の力を鬭争的にまで發揚すべかりしことを思ひ合せば足りよう。斯の如くして經濟社會にては其の外延たる財的流轉の範域又その推移が、内包に於て極度なる自己の確立その發揚により裏付けられる消息を觀察すれば、特異なる經濟史實としての貨幣資本企業などの發明發展の徑路は、とりも直さず右様の自己本位鬭争主義に基づく機會の獨創的先見的把握に發足し發現せることを爰に關説し能ふであらう。

二、經濟社會の原理

之を他の考へ方に導きて原理的に經濟社會を觀れば奈何。思ふに經濟的範域

は其の本質がゲゼルシャフトの最も純粹なるものと思惟すべく、以て諸他の組織たるゲマインシャフトに對立して存在するのである、(テンニイス^③)。其の謂は本質、意志的社會、即ち全體が目的體にして各自己は手段として犠牲視せられる團結なるに非ずして、「任意意志的社會」即ち各自己はそれ自ら目的體として利益を追求し但だ便宜による全體の集合として經濟社會を想定すべし。從つて若し組織をとりて有機的なる體型或は個人にとりて犠牲的なる體型、ゆゑに本質、意志からなる共同體を以て所謂社會の本體なりとせむか、經濟社會は其の實は社會を成さず、經濟する者は社會を構成せずとも言ひ得よう。蓋し其の體制は極めて隨時隨意の集團たり、如實に「利益本位」たり且つ單なる「機制體」たるに止る。現に財産私有を原動力に委ね自由競争を調節器と頼む經濟社會は、無秩序の統一の下なる似而非社會たり、最高度のゲゼルシャフトたり。之れが體型をゲマインシャフトに還元せしめ、財貨の流轉を共同體統制の下に還附せしめる事が、將來社會に期待し將た又原始社會を追想する論者の意向であるが、筆者の見る所、經濟自體が財の流轉であり且つ其れが效果的充當を豫想する限り、又その範圍裡の取引の世界は本然ゲゼルシャフトたり、されば經濟その事を撤去せずして採り能ふ策は唯その度を

の範圍を減縮して止むと論理せざるを得ない。遮莫かくの如くして有機的社會の機械化若くは犧牲的社會の利益化の方嚮にこそ經濟史の過程は辿られるべきであらう。以上はテンニイスの創始的見解に準ずるものであるが、尙ほ他の一の觀點より見るも經濟社會は血屬團體の如くに本來的なる團結に非ず、假に財の取引關係を紐帶として結束せるもの、故に其の實質が派生的なる社會たるに止るも謂ひ得るであらう(高田博士⁽⁴⁾)。試みに這般の社會的聯繫を發生的見地(A・B)より及び結合の本質(a・b)並びに錯綜關係(a'・b')より見て、次の如くに表式するとともに、矢の方向を以て時間的推移を示すであらう。



a' 部分社會

a' 部分社會



b' 全體社會

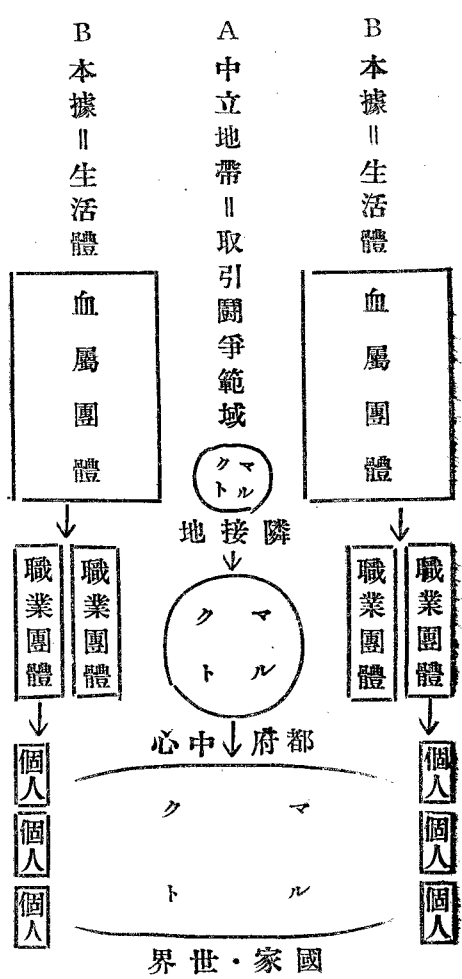
經濟社會は自然的機縁によらず、經濟的なる後來の紐帶によるB派生社會の一にして、即ち財の流通に職由する社會たり、中に就きBのb集體的利益社會こそ經濟社會の本位である。それがBのa犠牲社會の位置に止るときは所謂共同體たるものにして、財の流通は原則として配分の形式をとるが故に鬭争的取引の餘地なし。その之れを見る所、流通が駆け引き、取り合ひを基調とするはBのb集合體型に於てのみ。その裡にありて諸他の團體ギルド・組合・會社の如きが孰れもbのa'部分社會に該當するのであつて、依而以てbのb'全體社會を形成すべし。市場組織確立以後に於て斯く社會的全一體としての經濟範域が確定し實現するのであるが其の以前は部分化なき社會にして即ち限局されたる特定市場地域のみ存立し、仍つて市場の空間的解放乃至時間的擴充が未だ備はらず、事實として時期未だ早く經濟の發達が不十分にして經濟する者は諸他の觀念に於てとひとしく市場に就ても未だ抽象的に把握するに至らざりと觀じよう。謂はば財貨は持ち寄りの關係にて、その特定地に參與し出入する限りに於てのみ「利益化」し他の時は然らざ

る關係なるが、其の關係を進出點として先づ以て經濟社會は存立すると想定し能ふのである。隨ひて犧牲的なる團結若くは有機的統一體、即ち財産私有自由競争を前提せざる財貨の共同生産分配の體型は、論理的には、前經濟史的事實たり。却つて財の流通を機縁とする限りに於ては、假令其の體型は任意的集合なるにもせよ、なほ能く經濟社會は存立する、他の契機たる血縁地縁に本づくものと相並びて而かも識別されて能く介立する事を古今の史實より徵證するを得。同一の事情を他の表現を假りて示せば、家族生活の傍に萌芽したる取引市場の成長、即ち平和團體外の闘争團體の進行、その實質から見て強制調和の短縮の反面なる人格發現の自由化に伴ふ、闘争可能範域の擴大こそ、經濟史が注目させる所の過程でなければならぬ、(ブレンタノ⁽⁵⁾ 福田博士⁽⁶⁾)。例を以て指示せむか、それは家計の問題では無く、資本化、企業化の實認にあるべし。

三、所謂經濟組織擴大の表相

理解を更に克明ならしめむが爲に、典型的なるものによりて表示すれば略次の如くなるであらう、而して之に隨つて所謂經濟單位經濟組織を正當に概念づける爲事に以下引き續いて當面するであらう。

大凡の輪廓は右の様であるが尙ほ實質の上から補充すれば次の表現を爲し能ふべし。



B 內的關係——平和互助主義に立出して——獨立自營への方角——目標は消費の安定
(他よりの保證なし)——要は生活の問題

A 外的關係——相互鬭爭本位に進出して——市場範域擴延の方嚮——指標は財貨の流
轉(他よりの制約なし)——取引の問題

之を要約するに凡そ經濟に關するもの「經濟的者」は生活に没頭するBの行路に於てでなしに、Aの方向即ち「市場構成の行程」に於て捕捉されねばならぬ。例之奢侈を經濟に即して認識するにも生活行爲に則らぬ市場行程の立場に於て之を試み得たのであるが、更に又その行程Aに關與する限にありて凡て經濟する人「經濟者」が出現するのであつて、然らずして他のBの過程に止る間は、單純なる人々「生活者」としてのみ勘考せられるに終るであらう。随つて又經濟史の過程はAの方向にあり、而して他に無し。故にそれは「鬭爭—冒險—投機」の段階を通じての市場構成原力發現過程である。斯くて鬭爭行程の進行は對的關係者の増大に伴ふ取引市場の地域的擴大より空間的解放への推移となる。其の平面は互助本位なる人的結合の縮小化にして、畢竟他人は他人より他人は盜賊へまでの意識の移り行きである。蓋し又市場の範域は取引懸引の許容せられる範圍その故での中立地帯たり、斯の鬭爭可能範圍の擴延は頓がて「掠奪の合理化」—先見的投機的獲得の機會を招徠する、これ企業組織化資本主義化の傾嚮に他ならぬものである。茲に於て經濟史の過程は生活の本據の間に介在する中立地帯の認識に出發して、生活體より遊離したる「經濟體」即ち經濟者經濟制度その他經濟的者の具體化されしもの(の客

觀的なる存在その實現をあとづけることにあらねばならぬ。而して其の客觀的なる表彰をば經濟的者の中心觀念たる財の流轉の相に想定することが、根本の立場に於て然り。然れば上掲の表式に就ての理路よりして、人を所謂二重人格において識認するの餘儀なき事、次の表明の通りであるが、即ち、

內的——單なる生活者として——一般的若くは諸他の價值づけ關係にての存在
外的——經濟者として——財貨流轉を契機とする干繫にての存在
而かも此は結極にて經濟を一元的に勘考せむとするに相應するであらう。

四、經濟體の社會的關繫

人は市場構成の行程に繋るとき始めて、又その限り經濟者たり且つ經濟的なる諸行爲を營む。通説の如く經濟單位の縮小經濟組織の擴大が表式的傾向を示すと謂ふ可くんば、同上の見解に立脚し又その意味での補足をなして正しき完き理解たるを得べし。按ずるに經濟單位は生活の態様によりて裏づけられるに非ず、それに拘はる限りは未だ單位たらず、却而市場に干與する限りにして、經濟單位たり。然るに在來の見解にて例之家族を經濟單位と想定する場合は一、家が主體として經濟を營み經濟行爲を客體となすと解するものにて、其の意味で、單位が對當

する經濟は畢竟は家計が消費か何れも個人的内部關係に止る。しかし其れに對應すべき在來謂ふ所の「組織」としての經濟は營利乃至取引の外部社會的關係を指示すべく、結極經濟の概念を極めて多義的に用ひて熄むのである。而かも斯く個人的内部的關係に止る間は正しき經濟の概念は導入されず、即ち家族が營む行為たる自足自立的共產的行爲は、偽或は前經濟行爲たるにすぎず。經濟の問題は隨而經濟單位の概念も亦所謂家族經濟と本質上殊なるべき外部的社會的流通關係の裡に捕捉されねばならぬ、言ひ換へむか正しき經濟單位として家族は、個人的干係なる家計の主體とは別に切り離して理會されねばならぬ。然るところ家族が一家として社會關係に於て單位づけられるのは、社會學的概念としては成り立ち能ふとするも、既に謂ふ財的流通關係に出現するに方つては、家族は家族としてに非ず、個々の家族員が人格として出動するものにて、即ち謂はゆる家族經濟の機關としての家族は經濟に作働するに非ず、此の事は現在の經濟社會の下にて明に看られるのであるが、同じ事情は取引交通市場の實現する經濟編制の下にあつては常に既に然るあるを觀取すべきであつて、例へば諸他の團結職業團體組合社會が所謂單位と想定せらるるあるも、それは其の團結が作働する機關の故に、換言す

れば其の採る機能たる家族に於ける消費と同趣の工事販賣等が經濟的なる故を以て單位づけられるに非ず、その代表する體型或は機制的人格が財貨流通裡の社會的關繫に出現するが故に始めて經濟の問題となるのである。同一の事理は經濟組織につきても勘考されねばならぬ、即ちひとしき上位概念をもて財の流通の契機により把握せられる編制として經濟組織は存すべし。但し嚴密には經濟は組織化せられをらざること本論冒頭の如ければ、爰には所謂市場を中樞として且つ其の運営に繋る限りを範圍とする編制を構想しよう。從つて謂ふ所の經濟組織の擴大は即ち這般の範域の汎軸的擴延を意味するに外ならぬであらう。然り而して其れに對應して經濟單位は縮小化すると謂はれるのであるが、その意味が生活體型の縮小であつて見れば、开は正しくは經濟單位に就ての理解に非ず、今その含意する所を「經濟的」に再考せむに、いはゆる縮小化は共同的財産所有範圍の分割化を指示するものであつて、畢竟するに經濟社會の發現及び發達の豫件たる財産私有自由競争の内包を裏づけるものたり、又その故に財の流轉に牽連あるものにして、斯く理解せむか所謂經濟單位たる夫れぞれの生活體は其れが社會的全一體の經濟的編制に關與する限りの個々の經濟體なりと思考し能ふであらう。

抑々單位對組織の對比的關係乃至より一般的には分化對集化の進行程の構想はダーキンの進化論よりスペンサー其他の社會有機體說に至る生物學的類推の理説を根據とするものであらう。しかるに之を經濟的なる領域に移して考へるのに、經濟社會は既述の如くして機體たるに止り有機的統一を見ず、仍て其の内質は寧ろ宜しく個體對全體の機制的關係の裡に理會さるべきものである。而して經濟は個體が全體に對する外延的態様、個體が全體に繋る契、又個體が全體を形成するに過程に於て意味づけらるべきものである。然れば通常に經濟組織と稱せられるものは個體としての經濟體に對應するものなる全體としての經濟體たる經濟社會の編制であらねばならぬ。個體と全體と若くは個人と社會との關係は、恰かも點と線とに對比せられる通り、一は他を前提し含意するが如き相互依存的の關係にして、個體が一定の意義に於て其の自立性獨立性を失ふときに全體たるものが概念として成り立つ(左右田博士⁽⁷⁾)。其の事理にして經濟的個體は限られたる意義又範域にて即ち財の流轉の限りにて、その自立性を消失して謂はゞ中立性へ推移するとき經濟社會が實現せられる。かくて概念的にのみならず時間的にも亦そのモメントに於て全體としての經濟社會が理會せられる理であるが、經濟

史の過程は結局が時間的に這個の契機において把捉せらるべき經濟社會の展開のあとを考察するものである。所謂經濟單位經濟組織に關する法則にて暗示せられる所も亦、斯く個體對全體の關係にまで還元すべきであらう。かくては社會學的理解一般に歸着するであらうが、本考察にて意を用ひるのは、其の契機又その限られたる意義における個體の存在及實現でなければならぬ。茲に一般的價值づけ關係における個々の生活體と識別せらるべき經濟體(具象の)又經濟的者(抽象の)が在ると合せて、其の個々の集成相關の位置關係にある經濟社會、即ち經濟的なる一の「評價社會體」たるものが存立し能ふ理據が與へられる。言ひ換ふれば個々のなる價值づけの主體としての多數の個の集積がおのづから表明し來る社會體であるが、その評價が一の特定の客體に對向して形成せられる社會體であつて、筆者の想定するところ、其の特定の評價客體が則ち市場であり、而して經濟的なる評價社會體として「市場適能範域」を理解するものである。乃ち經濟史が採りて跡づけとするものは一般社會體生活態でなきは勿論にして、上の如き特定のモメントにて把捉せられる又は限定的價值づけの下なる個體並びに全一體としての社會、兩者の關繫的推移を措いて他に求むべくもないのである。

五、市場構成の徑路

經濟史的現象は大約市場構成の徑路の裡に限局されて捕捉されるべし。爰に遺されたる爲事として其の徑路を理論づけることに當面し、それに牽連して「資本主義化」の傾向を同時に理會するであらう。蓋し資本主義なる名辭若くは表現を人は經濟生活を批評し非難し論決する爲に屢次使用し來りつゝも、それを以て經濟生活の實相そのものを客觀的に識別し概念することを爲さぬのが常例であるが、以下の所述は其の客觀的表彰體なる市場の推移をとほして、所謂資本主義の實相を畫き出さむとする者である、デムバルト (8)。扨謂ふ所の市場なるシステムは財貨の生産が對他的となり隨つて取引關係を通じて財貨の流轉が顯れるのを機として發現する。仍而市場の實質は次の兩様に於て窺はれよう、即ち一は取引、販賣、可能性、他は取引、販路、適應性、之であるが、前者は一の市場が有つ販賣能力を指示するものにて、ゆゑに技術的には有限なりとするも、經濟的には他の制約なきものたり。之に反し後者は市場一般に附與せられる販賣の機會を理會するものにて從つて一定の販賣範圍に對し物的に又場所的或は空間的に限定を伴ふものなり。乃ち限りなき販賣の技術的能力と之に對し限度ある取引の機會とが相依りて市

場を實現するのであるが、此の經濟的考察にて理會するものは其の後者が主眼である。その「機會」の増大言ひ換ふれば取引適應性の増大こそ經濟的進行なりと解されるわけにして、且つ終極に於て其れは財の需要が對市場的に充足される以上は其の需要の形成に連繫するであらう。經濟發達の第一段にて市場は將に漸増しつゝある需要に端的に對向するものとして、又それに制限づけられたる範圍をとりて成立す。且つ對市場的に提供せられる財貨の量も販賣能力の伸張とともに漸増しつゝあるのに際する故に、販路若くは機會が綜合する意味での市場は實質上の擴大を將來しつゝあり、之れ人口の増大に勢ひづけられたる財の需要の昂昇に伴ひて惹起される流通場裡の最初の擴延たり。次の階梯にては新興の有力なる消費者の集團たる富豪貴族大都市植民地などよりして、より大なる財の流轉が喚發され来る。如此財産能力によりて起さる需要の増大は、第一次財即ち直接財の外に第二次財即ち間接財としての生産手段の需要を隨伴するものにして、此所に市場に資本主義は萌芽を初めよう。更に該生産手段を通じての實權が市場を支配し畢に生産が需要に制約せられぬのみか、需要に依據せぬ生産が示現するに至り、取引の機會が「冒險的投機的」に獲得せられる段階に入りて、資本主義は高潮

期に達するものである。之を市場形式の態様より觀察すれば次の如き進展が見られよう。先づ第一階なる資本主義以前の時期は經濟者は相互的團結の傾向を採るを以て、漸進せる取引の機會をば所在の凡ての市場取引地點が分取し其の影響を分け有つ情態に止る。次に資本主義經濟の階段に入りて市場は愈々擴大の傾向を來すのであるが、其の早期にあつては、第一に一地點の取引の擴大、取引の機會の増進に促されて、絶對的な販路の擴延の傾きを示す、その傾向は先づ市場取引地點の個數的増大を招くのが通例であつて、之なき限り個々の市場地點の取引の範域が膨大しよう。第二には特定地位地への販路の集注、凝結の傾向がある、延いて個々の種々の財に對しより大なる市場が實現しよう。その成り行きは諸種の因由より招かる、例之人口集中の傾向に伴ふ特定地に於ける需要の確保とか、軍隊的需要による集中とか、植民地又輸入港に於ける獨占保證とか、特定地點なる商人の一定集團の占取とか、複合的財の生産地における諸生産要具の販路の増大とか、行政上商業上技術上諸般の事情に影響されて市場の地方的集注が招來されるのである。却說資本主義の發現はおのづから「國民市場」成立の期を劃するものであつて、即ち取引適應性が都府及びその周圍よりも尙ほ大なる地域へまで伸張し來

る、其の間に原始的な地方市場が例せば穀物取引などにつきて存する側ら、限定された國際的取引が例之奢侈品工業軍需品工業などにて相並び存するのを見るのであるが、更に進みて市場が地域的解放を促進するに及んでは、個々の諸都府が單純なる地方市場に轉化することともに、勢ひ一國は、世界市場の構成へ參加し出動するに至るべし。これが成熟せる資本主義經濟の段階に他ならぬものである。

六、資本主義的經濟社會の成立

表見上なる取引事情の推移は其れに伴ひ實體に於て如何に影響を蒙むらしめたか。之を需要の側面より觀て該市場に對應する其の性情の變化を察すること。に因つて、所謂資本主義化の實相が探り出されねばならぬ。さて資本主義早期にあつては未だ其の以前と同様の需要の性質が殘留する、即ち最終の消費者により常に制約され、其に合致するやう生産を行ひたる經濟の第一階から、移つて第二階に踏み入つても猶ほ依然として終極の財の使用量が分量に於て又種類に於て需要を支配する有様である。蓋し資本主義當初にては未だ主要なる需要は個人的使用財によりてのみ存し、又需要は實存せる有效的なるものにより決せられ、且つ消費者の欲求が生産の種類と様式の決定者たり。随つて財の生産範圍は消費者

が利用し能ふ貨幣的手段の分量により定められ、故に又需要は消費者の所得の増大と共に増量し、一に其の財産能力に依據する次第である。要するに取引需要一般が未だ或る種の有機的なる拘束の下に制限せられざるのが資本主義の成熟以前の實情にして、此の點に於て經濟社會は未だ完成せざるゲゼルシャツたり。以て現在の組織と對照せられる點であるが、今に於ては取引の範域にあつて個々人が凡て重要な契機として發現するゆゑに、經濟社會は一の機械的構成を保つに止る。如上が中世を通じて現在に至る經濟の進行に伴ひし社會の利益化(前段參照)の一面を表はすものにて、且つ又經濟社會の資本主義化の第二の進程を示すものなり。重要な推移は個人人格が全的な取引關繫市場の成生に對する決定的動力となつて現はれる事、他の語を以て言へば、純なる經濟的者としての人格が市場行程に顯現し來る事である。事實現在の流通關繫にあつて主動的な需要はよし遡れば終極にて使用財にまで及ぶにもせよ、その大部分は生産手段に對嚮するものとして指示せられるのである。却つて最終消費者の需要に據立するに非ずして、その大半は舉げて「投機的豫見」の基礎に本づくもの、必ず在る可しとの假想又は希望を頼んで取引需要の生起するのが根本の特異性である。それが資本主

義の眞面目であつて、於是乎財貨の需要は本質上財の生産の當路者の手によりて決定せられること成り、自然の勢ひにて其の構成に應つて終極の財の使用者は埒外に除外せられるのに了るであらう。斯くて其の傾向にして最高頂に達せむか、曾て取引需要者の主動力が消費者たり隨而専ら其の財産能力に依存したる經濟發達の原始期とは正に霄壤の開きを示し來るべし、乃ち資本主義經濟社會にありては取引需要者は實は生産者彼れ自らたり、而かも彼の所得能力をも基礎とせずして彼の自らの「信用」に依據して能く財貨の流轉が進出すると云ふ特異の色彩が畫かれるのである。此の方向は取りも直さず「企業者」―財貨の流轉行程又は範域に於ける純然たる經濟者としての企業者の出現する道行きを暗指するであらう。蓋し取引の主動的當路者として這般の「信用負託者」たり、その裏面にて市場行程上の「危險負擔者」たる者こそ企業者の實體でなければならぬ。而してそれを裏づけるものは即ち資本主義的精神そのものである。註釋すれば一面は貨幣追求冒險心發見的精神から成る「事業欲」と、他面にて計算的熟慮的合理性に向ふ「町人魂」の綜合に外ならず。且つ如是精神が漸次的に加速度を加へて、市場構成の過程裡なる經濟の進行に參與したる事が史實により確め得られよう。以上の理解を試みに

表式すべし。

I 經濟以前(前經濟史的事實)

財貨の流轉無き——消費生活の爲の生産——共產又は物々交換の社會

II 經濟以後(經濟史期)

財の流通に伴ふ市場形成あり——對市場的の生産——交通經濟取引の社會

1 資本主義以前

消費者に制約せられる限りの生産——對人的取引關繫

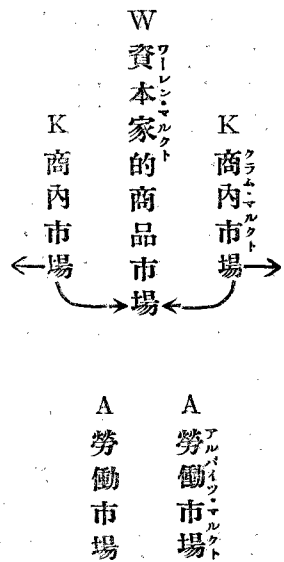
2 資本主義早期

消費者に依據する生産——場所的關係による市場(國民市場の成立)

3 資本主義時代(嚴經濟的事實)

企業者本位——信用投機を基礎とする市場の空間的擴延(世界市場の實現)

斯様な立體的の徑路を辿つて嚴然たる經濟の實體が築き上げられたのを識るのであるが、該經濟社會を平面的に展開すれば奈何。先づ現在の編制における財の流通範域を案ずるに大約次の通りである。



右の様式は即ち現代の經濟のリズムを暗示するに他ならぬが、K 商内(小賣)市場の動向は貨幣を享樂手段に代へる運動に止り、其の限り反中心的たり、W 資本家市場と距り又 A 労働市場とも直接關連せず。W 資本家的商品(卸賣)市場の動向は向中心、心的にして、その實質は K 商内の運動の集積たり且つ現に A 労働の行動を隸屬するものである。而して A 労働市場の運動即ち労働なる「財」の流轉は、右の資本家的集中環狀運動の内部に於ける連絡關係として存在す、故に A は必ずしも W 資本家市場の前提要件たるべきに非ず、反對に W は K 商内市場の存する限り存立し能ふものなるが、現在の編制の下にあつては A 労働の動向は必要なる「鐵鎖」を以て W 資本家の動向に隸從するのである。蓋し資本家的商品の市場範域こそ現在の經濟的波動の本源であり、資本を基礎力とする最も利益社會的なるものにして、諸他群

小の經濟的運營を朝宗せしめる事より一層進んで、それに迄すべての末流を捲き込みて熄まぬ經濟のリズムの大本であらねばならぬ。尤も如上が一朝にして展開されしに非るは論なき所、其の當初にはK單純なる商内市場が實現したるが、進みて資本主義化の過程に着きてK資本家的市場が顯現するとともに、對應してA勞働の市場が出現し來りしと觀せられよう。扱又這般の經濟史的行程を平面的に引き直して見れば、つまり經濟的範域裡に於ける社會の部分化全體社會の錯綜關係(前段參照)を指示するものと謂へる。典型的なる例示を引けば消費組合と株式會社と勞働團體の關係の如き其の間の消息を物語るであらう。而して現存の平面の限りに於て其の中樞に對當するものとしては、資本家的市場行程に出動する純乎たる經濟者即ち企業者を指摘すべきであつて、斯者が經濟史の從來の行路たる鬭爭冒險投機の進程を體現するものとして、時間的に又概念的に諸他の經濟的者の極限乃至上位として順當に理會せられ能ふであらう。此の理路の當然の歸結は嚴密なる企業態則ち完き「動態」をば經濟の極限として概念づけるべくなるを以て、且つ其の側ら企業者利得たる利潤を所謂「危險」に即して理說せむと欲するのであるが⁽⁹⁾、本考全篇を通して敬意を表する高田保馬博士⁽¹⁰⁾とは此の點に於て

正に對極的の立場に在る事を謂はねばならぬ。(大正十二年拾月於須磨脱稿)。

參考書註

- (1) Bucharin: *Ökonomik der Transformationsperiode.*
- (2) Maine: *Village Communities.*
- (3) Tönnies: *Gemeinschaft und Gesellschaft.*
- (4) 高田博士: 社會學原理。
- (5) Brentano: *Die Anfänge des Modernen Kapitalismus.*
- (6) 福田博士: 社會政策と階級闘争。
- (7) Soda: *Geld und Wert.*
- (8) Sombart: *Die Moderne Kapitalismus.*
- (9) Knight: *Risk, Uncertainty and Profit.*
- (10) 高田博士: 利子ノ嚴密動學說。(改造誌上)